

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日 通稱首飾部 秋永忠雄 法華二七号
令和二年七月一日発行 二第百二十三巻 第七号

ホトトギス

七月号



風雅の小筥〔三十〕

廣太郎

このコーナーも三十回を迎えたところであるが、今日のみならず世界中未曾有の危機を迎えているといっても過言ではないだろう。この号が皆様のお手許に届く時にはどうなっているか判らないが、これを書いていく令和二年四月二十三日の時点では、彼の新型コロナウイルスの蔓延で、日本では緊急事態宣言が出されていて、外出も自粛するように要請されている。そんな中、やはり制限されるイベントとしては、我々に重く押し掛かってくるのが、俳句会等の座の文学としての営みである。実際私も三月の初めに関西で句会が行われて以来その後、関東ホトトギス俳句大会を皮切りに、現在まで全ての句会が中止されている。私が一月に参加している句会には、十数名の句会や百人単位の大会等を合わせて平均十数回である。それらが全て中止となり、皮肉な事にそれだけホトトギス社の仕事が大いに捗っているのである。あらためて句会で費やしていた時間の長さを感じると共に、大会は多く土日に行われていて、それこそ年中無休状態で、家に居る時間がこれほどまでに無かった事を実感させられた。尤も今回の自粛要請で、ホトトギス社でも在宅勤務を実行しており、この原稿も自宅のパソコンで作成している。パソコンといえば、一度メール句会がある句会で行われた。実はパソコンの句会も予定されており、何か将来の句会のひとつの可能性が示されたような気もするのである。確かにあくまでも座の文学としての句会は大切であるが、俳句活動の一つの手段として、ネットの世界にもある程度着目するのも悪くは無いのではないだろうか。

旬日記 汀子

令和元年七月一日 ロイヤル俳優

取込みし植木鉢より天道虫
メモ一つ消し一つ足す涼しさよ
サミットを終へし大阪とは涼し
要人の泊りしホテル涼しさよ

七月六日 芦屋ホトギス会

涼しさをせめて馳走の会場に
松蟬と気づきたるより庭案内
残る名の三八通り夜店かな
消息に一喜一憂友涼し

七月七日 下萌句会

吾に山は見るだけのもの山開
戦争の記憶の中の夾竹桃
遺句集の届きし朝の涼しさよ
冷房の向きを正して一と所

七月九日 大阪倶楽部

一歩づつ又一歩づつ露涼し
併号も決まり涼しき席の待つ
月見草つないで行きぬ旅心
梅雨草の待たる旅となりけり
月見草より展げゆく旅路あり

七月九日 綿業倶楽部

兜虫森へ返して荘を去る
兜虫家族揃ひし頃のこと
思ひ出は過ぎ夏霧晴れてをり
稿債を仕上げ夏霧晴れてをり

七月十一日 清交社

心太故人の話近づけて
思ひ出の残る扇を手にしたる
梅雨明の近しと今日も降つてをり

明日の旅明後日の旅梅雨に処す
七月十二日 工業倶楽部

サンングラス一人の時間大胆に
終戦の思ひ出消えず夾竹桃
夏霧の消えぬ着陸態勢
似合ふとも似合はざるともサンングラス
家焼けて夾竹桃の残りけり
七月十三日 東海ホトギス俳句大会前日句会
晴れしことせめてと思ふ梅雨の旅

七月十三日 東海ホトギス同人会

引越を控へ涼しく現はるる
富士見せぬ梅雨霧ふつと吹いてみる
七月十四日 東海ホトギス俳句大会
もう帰路の心配梅雨の遠出かな
富士を見ぬまま三島去る梅雨の旅

七月十五日 地球ボランティア句会

旅疲れ失せ涼しさを身に纏ひ
海の日の海を抱げし街に住む
稿債を一つ仕上げし涼しさよ
忙しさよりも涼しさ勝りけり

七月十六日 有恒俳句会

ハンモックとは乘りにくく降りにくく
さり気なく坐つてをりぬハンモック
何となく祇園祭と気づきけり
忘れぬ涼しさはたと出会ひたる
涼しさに馴れてはならぬ旅支度
消えてゆくこと知つてをり虹の立つ

七月十六日 無名会

涼しさにあて旅疲れ消えてをり
旅多き疲れ解きて風涼し
虹消えて旅の心を納めけり
明日へ又踏み出す一歩涼しさよ

七月十八日 夏潮句会

原爆忌遠きこととはならざりし
花水届き華やぐ句会場
横文字は覚えられない花水
その花の名を又問ふも花水
その後も語り継がれて原爆忌
ホトトギス事務所移転や梅雨最中
七月二十日 石見ホトギス俳句大会前日句会
梅雨を吹き払ふ山風強くとも
草原の一歩一歩に風涼し
この晴をたまはる涼しかりし
御幸待つ三瓶は草を刈り尽くし
七月二十一日 石見ホトギス俳句大会
知り尽くす三瓶まだまだ汗涼し
出会ひとは涼しき別れあることを
星みよと晴れゆく三瓶去るも夏
七月二十五日 きざらぎ会
稿債の一つ終へたる露涼し
上京の手順に馴れて露涼し
過ぎてゆく時間を追はず露涼し
世の中は世の事として露涼し
七月二十六日 時雨句会
花奠塵を敷きて客問となりしこと
一斉に蟬の季節のはじまりし
旅共にせしを語らん人蟬時雨
この暑さ心に掛かる人のこと
梅雨明けぬ三瓶の旅となりしこと
フアックスの便りは月下美人の夜
七月二十六日 アネモネ句会
虹立ちて遠近感を失ひぬ
噴水の止まり門限なりしかな
台風の予報の外にゐる集ひ
花籠の青の涼しさ活けられし
インタビュウ受ける心の涼しさに

廣太郎句帳

廣太郎

令和元年七月三日 カトリック新聞選者吟

夏蒲団蹴り孫の足伸びゆけり

七月四日 蕉心会

露涼し虚子の遺墨を見付けもし
遊船の客は一羽の鳴かな
箱庭のノアは洪水めく災禍
風神に押され梅雨雲退く速さ
夏潮に翻弄されし川面かな
水の色変へて黒南風過ぎゆる
咲くものを隠して館は万緑裡
風鈴を鳴らす佳人の掌

七月六日 芦屋ホトトギス会

松籟といふ松蟬の口短調
見送らる孫の視線の涼しさに
夜店の灯イミテーションをそれなりに
七月七日 青嵐会 芦屋例会

S L の煙突つ込む大夕焼
夕焼にトランペットの音外す
七月八日 朝日カルチャー若草句会

雪浜に蝦夷の歴史といふ重さ
炎天に波打つてあるアスファルト
炎天に鳩オクターブ低く鳴く
雪浜を踏んで此岸を遠ざける
夏夕地下街に人吸ひ込まれ
雪浜に埋まるジュラ紀の記憶かな
七月九日 むさし野吟行会

万緑に埋まる都心の一等地
梅雨寒に大邸宅の黒々と
描く人詠む人梅雨を遠ざけて

石の上に一花文字摺草孤高
七月十一日 土筆会

オフィス街ひつくり返し大夕焼
蒲の穂の揺れて地軸を傾ける
大夕立都心の電波塔歪め
七月十三日 東海ホトトギス同人会、大会

移転の荷整へ梅天の句座へ

五月闇払ひ新幹線西へ
全容を明さず富士の山開
朝曇より句心の立ち上がる
水無月の渴水といふ池の黙
満席の新幹線の梅雨湿り
神木の毛虫を天の使ひとも
七月十五日 ホトトギス分事務所内から神田駿河台に移転。
七月十六日 青嵐会 東京例会

移転の荷解く指先の露涼し
丸の内麦茶一杯にて去りぬ
その中に円座も加へ移転の荷
七月十七日 北國文芸選者吟

七月十八日 登高会
ビル街と別の涼しさある移転

百合の香に孫洗礼を授けられ
夏潮に漕ぎ出して行く如移転
蜜豆や夫甘党妻左党
鬼百合に靈気淀んでをりにけり
辛口の話は蜜豆の後で
日本にも空母再び夏潮へ
七月十九日 浜田吟行会

山頂へ梅雨霧吸はれゆく速さ
山陽と山陰梅雨に結ばれて
旅涼し遠くて近き浜田かな
七月二十一日 石見ホトトギス俳句大会

青葡萄三瓶に生れしワイナリー
夕菅や揺れて今宵の星招く

梅雨雲を払ふ風ならもつと吹け
三瓶野を画布として散る合歡の花
夜の秋ワインに蕩けゆく夢路
七月二十三日 若水句会

水無月や雨に始まり雨に終ふ
虚子の書と紙魚もろともに移転せし
梅雨明を間近にしたる酒の味
江戸の世の語部紙魚の古地図かな
移転てふ梅雨明を待つ心かな
ビル街と別れ梅雨明待つ移転
水無月の別島水禍止まざりし

七月二十四日 目黒学園句会
三瓶野に星を降らせて夜の秋
汗の数だけ移転の荷積み上げて
鉢といふ宇宙に金魚育ちゆく
空広くなりし移転や夜の秋
人間を取り戻したる金魚の眼

七月二十七日 野分会 夏行
梅雨明けぬ江戸の快晴発ちて来し
語部に岐阜提灯の気品かな
三瓶野に別れ鶴川に再会す
人間の生活に続く鮎の川
城下町信号の無き涼しさに
手と足が縫れて郡上踊かな
甘酒を吸れば名句逃げてゆく
宮内庁式部職てふ声涼し

七月二十九日 あうたう句会
潮風に文字摺草の振れ解く
噴水を見下す星の孤高かな
六十の瞳涼しく快癒待つ
滝落つる山気靈気となる刹那
七月三十日 橋本くに彦様への寄書

梅雨明くる次はあなたの快癒かな

雑詠

廣太郎 選

恋猫の引き返す扉ありにけり 福山 竹下陶子
 初午の植木を売つてゐるばかり 同
 下萌の大地を踏んでをりにけり 同
 鷺替のぞめきの人の渦に入る 西宮 本郷桂子
 鷺替や浪速の空の畏まる 同
 鷺替へし声の奈落に引き込まれ 同
 芳潤に咲ける三桮雨に濡れ 川崎 栗林圭魚
 山寺の格を諾ひ玉椿 同
 紅椿日差し遍く葉を照らし 同
 春月やビルにゴジラの影吠ゆる 渋川 木暮陶句郎
 風光る君が板書の化学式 同
 待つといふ力漲りゐる春田 同
 咲くよりも落ちしが目立ち寒椿 熱海 嶋田一步
 寒椿落ちゐて動かざるものに 同
 見馴れたるものとなりゐて寒椿 同
 荒海もけふは穏やか冬ぬくし 長岡 安原 葉
 春待つや湖畔に並ぶ宿の灯も 同
 迎へたる雪 国人に京の雪 同

観梅の一本ごとの香の新た 龍ヶ崎 今橋真理子
 つつまるともなく梅が香の中に 同
 日だまりを動くことなく梅見かな 同
 白魚に無味といふ滋味ありにけり 袋井 湖東紀子
 木から木へ風連れてゆく梅見かな 同
 猫少し濡れて戻りぬ春時雨 同
 麗人の電話は二月礼者めく 東京 大久保白村
 思ひ出の人や成田の葦野に 同
 厩出し馬すぐ走り牛歩む 同
 打ち続けたる極月のキーボード 静岡 須藤常央
 雑踏を行く極月を縫ふ如く 同
 アメ横の極月に呑み込まれゆく 同
 落涙のごと山茶花のとめどなく 熊本 岩岡中正
 ふり返ることばかりして春隣 同
 マスクしてすこし孤独をたのしめり 同
 言ふなれば無事これ名馬老の春 相模原 木村享史
 春を待つ富士真ん中に大八州 同
 風だけが春待つ富士の邪魔をして 同
 これ以上撒けざる高さまで木の芽 香川 湯川 雅
 湖へ散る彼岸桜の湖へ垂れ 同
 青き踏む一步に一步分の先 同
 草刈つて草の匂ひの乾きゆく 東京 今井肖子
 四阿にもたれ合ひたる昼寝かな 同
 影よりも黒き犬連れ梅雨晴間 同

雑詠句評（六月号より）

笛鳴つてラグビーに影生まれたる 東京 阪西敦子

俳句でラグビーというと競技種目としての名前だけでなくラグビー選手のことを意味する場合も多い。

体の隅々まで力を充電させてでもいるかのように定位置で動かずにいた選手達が開始の笛と同時に一斉に動き出したのである。その一瞬の影の動きを「影生まれ」と捉えた作者。つまり影に命が宿ったと見てとったのである。

開始の笛の一瞬を切り取り一切を省略したことでラグビーの躍動感を余すことなく伝えた一句であると思う。（しげ人）

令和元年はラグビーのワールドカップが日本で開催されブームにもなったが、作者は実際学生時代にラグーとして本格的にプレーをしておられた。そんな選手の視点から御覧になった情景だろう。観客席から観戦するのは別の迫力を感じる。この「影」に着目したところが秀逸である。（廣太郎）

ぶつかつてまたぶつかつて嫁が君 渡川 木暮陶句郎

「嫁が君」とは正月三が日の鼠のこと。その鼠が正月早々に部屋に出て来て、作者に追われて障害物に突き当たりながら逃げ回っている様子であろうか。しかし、こういうことは「嫁が君」でなくとも鼠であればありうることで、別におどろくことでもないと思われるのだが。作者は「嫁が君」だけに興味を持たれたのだろうか。又「ぶつかつて」も具体的に描かれていないので、どういう状況なのか、不勉強の筆者には結局よく分からない句という印象である。（公次）

最近では鼠が一般家庭の家の中に出没する事は考えられないが、昔は正月であろうと出没して、その三が日の鼠の忌み言葉である嫁が君を愉快に描いている。人間もそうであるが、鼠にしても人間と対峙して右往左往している姿が、何か正月のめでたさとしても伝わってくる。（廣太郎）

天地有情

子選

妹の美しく死す行秋を
 我孫子 副島いみ子
 太閤の城十六夜を肩に抱き
 同
 大江戸の空凸凹に鱗雲
 東京 稲畑廣太郎
 同
 二ヶ月に入りて漸く雪国に
 長岡 安原 葉
 同
 伊吹山名残の雪を染め上げし
 熊本 岩岡中正
 同
 朝寝して夢に会ひたる人いろいろ
 同
 白々と雨すぢ見ゆる野梅かな
 相模原 木村享史
 同
 老の春座右の銘に虚子の言
 同
 名句詠む人の昔は名ラガー
 同
 代々の医業継がむと大試験
 神戸 三村純也
 同
 辿り着く卒業といふ一里塚
 同
 凍蝶とふと我似たり日を恋うて
 同 千原叡子
 卒寿祝ぐアルパカ白き毛糸編み
 同
 沈丁の匂ひそめしは今朝のこと
 東京 今井千鶴子
 同
 この庭に紅白の梅ありし頃
 同
 露の臺開くと言はず解くと言ふ
 神戸 和田華凜
 同
 厩出しの北の大地を踏みしめて
 同

風の街来てあたたかき灯の下に
 東京 山田閨子
 同
 騒がしき現世逃れ梅園に
 龍ヶ崎 今橋真理子
 同
 鶯の声に始まる朝となる
 同
 初音聞きとめて一人でありにけり
 同
 冴返る音のする程空晴れて
 袋井 湖東紀子
 同
 冴返る事を覚悟の旅仕度
 同
 冴切の胸のふるへをとほく見る
 東京 今井肖子
 同
 たわわなり枇杷は暗さをこぼしつ
 同
 董咲く花言葉には愛とあり
 同 河野昭彦
 同
 妻愛でたちつぼすみれ風に揺れ
 同
 待春や悔い多ければ殊更に
 仙台 赤川誓城
 同
 婚にまだ母に逝かれし娘の春著
 同
 母生きてゐる限り海苔送り来し
 福山 竹下陶子
 同
 さより干す輶の女でありにけり
 同
 草萌ゆる収束信じ踏む一步
 宝塚 水田むつみ
 同
 春光を浴びて不安を吹きとぼす
 同
 二ヶ月やはや尽日になりしとは
 東京 高濱朋子
 同
 ふとこぼす蜩の吐息夜の厨
 同